

## 魯文の填詞

|       |                                                                                                     |
|-------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2016-03-01<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 高木, 元<br>メールアドレス:<br>所属:   |
| URL   | <a href="https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6182">https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6182</a> |

This work is licensed under a Creative Commons  
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0  
International License.



## 魯文の填詞

高 木 元

假名垣魯文の多岐に亙る文業に一瞥を加えた時、〈文学〉などと称することは憚られるような、夥しい〈雑文〉をものしていることに気付く。斯様な魯文の仕事は、文業などと呼ぶより寧ろ売文業というべきかもしれない。だから、それ故に「魯文は、近世と近代とを通貫する十九世紀末期戯作界の様相を典型的に体現した戯作者であつた」と位置付けても差し支えないであろう。此処に魯文研究の意義が存すると思われるので、様々なジャンルに広がるその言説を調査し蒐集してきた。

嘗て、魯文が他作者の著作に寄せた序跋類について紹介したことがあるが、本稿では冊子体ではない一枚摺に注目してみたい。ただし、宣伝用チラシである〈引札〉〈報条〉や、絵画に詠歌等を加えた〈画賛〉類に関しては稿を改めるとして、此処では錦絵の〈填詞〉<sup>2)</sup>について見ていきたい。尤も、他ジャンルと同様に、全貌を把握するのは著しく困難であるので、取り敢えず知り得た範囲ではあるが、具体例を示しつつ紹介してみよう。

本来〈填詞<sup>てんし</sup>〉という用語は『大漢和辞典』に拠れば「漢詩の一體。樂府から變化した一種の詞曲で、樂府の譜に合はせて字句を填入したもの。宋末に詩餘といひ、明の呉訥及び徐師曾に至つて填詞といふ。一定の圖式により字を填めるから

いふ。」とある、また『日本国語大辞典』（第二版）に就けば「中国、古典文学の一ジャンル。唐代に西域からはいった音楽につけてうたった歌詞が文学形式として定着したもの。曲によつて句数・字数・平仄・韻脚が定まっており、それにあわせて歌詞を填めて作るところからこの名がある。宋代に大流行し、長編の新しい曲も多く生まれ、宋代を代表する文学となった。詞。詩余。長短句。」とある如く、中国に於ける詩文形式の名称であつた<sup>(3)</sup>。

さて、我国の近世期における「填詞」という用語は、中国での意味用法とは異なっているので、まずはその用例を追いつつ、文脈に則して「填詞」が意味するところを確認しておこう。残念ながら、初出を詳らかにし得る資料の提示は未だ出来ないが、管見に拠れば山東京山作の江戸読本『国字小説小櫻姫風月奇観』（文化六（一八〇九）年十月刊）の口絵に、「九種曲」／＼廿載旁觀笑與顰／＼凡情世態寫來眞／＼誰知燈下填詞客／＼原是諛諧郭舍人／＼空香女史題」とあり（傍点筆者、以下同断）、また同書巻末の跋文に「京山先醒は京傳先醒の令弟也。彫蟲鼓刀をもて業とし詩を篇画を嗜む。本編填詞の如きは一時游戲の筆にして耳目玩好の書に属し、適口充腹の集には非ざるへし」と見えていて、これなどは比較的早い用例かも知れない。いづれにしても、序文の「燈下填詞客」は「燈下に戲作する者」と解せるし、跋文の「本編填詞の如きは一時游戲の筆」とは、つまり「小説の著述などは閑時の筆遊び」戲作」と解せられ、文脈から判断して此等の「填詞」は「戲墨」戲作の著述」という意味で用いられていると考えられる。

幕末になると用例は頻出する。魯文の切附本<sup>(5)</sup>では、『平井権八一代記』の序末に「嘉永七甲寅林鐘稿成談笑諷諷滑稽道場／＼鈍亭魯文填詞」と見え、野狐菴主人著述『神勇毛谷邑孝義傳』の序では「……草稿を脱すと雖、未序言なし。願くは填詞を記せよと、……乞る、まに／＼、其席の談話を序として、<sup>(6)</sup>攻めを塞ぐ」と言い換えられている如く、依頼された序文を書くといふ謂だと思われる。また、鈍亭魯文標記『摘要漢楚軍談後輯』の序末に「……此一条を論は、後輯稿成、序跋なきものから、填詞をものせんとてのわざくれなりかし／＼于時安政三丙辰、穠文月星合の夜、妻戀俗の戲作舍に毫を採る／＼談笑

諷諫滑稽道場

鈍亭魯文漫題」とあり、さらに『繪本早學』初編の叙末にも「……簡端に序して。填詞をかいしるすも。

所謂蛇を画て。足を添るすさみやあらんかし／時維安政四丁巳葉月初旬。毫採于戀俗小説書屋／稗史著作郎。鈍亭

魯文題」とある。此処でも「填詞」は序文のことを指していて、「埋め草」と振仮名が振つてある。

魯文以外では、出子散人作の合巻『天然徳兵衛幕夜話』（歌川國久画、文久元年）の序にも「……僕短才もて此半丁へ填詞ハさりとハ押の躊躇蝦蟇の面へ水の音。いけしやあ／と述るになん／文久元辛酉初冬／忍川の北窓に／山亭秋信」とあり、此処でも序文のことをいっている。

一方、「鈍亭魯文謹述」とする切附本『成田山靈驗記』の序末には「安政元甲寅晩冬／同二乙卯新春上梓／物の本作者鈍亭魯文填詞」とあり、鈍亭魯文抄録『國姓爺一代記』二編の序末にも「……此猛者が奇き美事を衆幼にしらせまほしくて、野末の爺が懇意をしるす事しかり／鈍亭寄魯文填詞」とある。さらに、鈍亭魯文鈔録『雙孝美談曾我物語』の序末にも「……鈔録巻を老舗として、爰に補集曾我物語、……燈下暗記一小冊を借宅假舎に筆を採る。／安政二卯歲秋新鐫／鈍亭魯文填詞」とある。これらは自作の自序であるから「填詞」は「戯作」の謂であり、特に切附本というジャンルは既刊作の抄録本であるから、「燈火の下に暗記した物語の抄録をする」というのも、きわめて様式的な序文の書式で書かれたものであるが、やはり「著述する」という意味で用いられている。ちなみに、安政三年刊の合巻『當世八大傳』でも、本文を抄録したことを「鈍亭魯文填詞」としているのである。

以上、安政期における魯文の用例を中心に見てきたが、近世後期に使用されている「填詞」という用語は、依頼された序文を執筆するという行為の卑下謙讓もしくは自己韜晦的な用語として使われ、その意味から派生して戯作の著述自体にも用いられるようになってきたものと考えられる。

ところで、一魁齋芳年の絵本『英雄太平記』（外題「繪本大功記」、外題芳宗画）でも、叙言末に「于時萬延二ツの年辛酉の睦月下旬。東都妻戀俗の南窓に毫を採繡像に填詞するものは鈍亭主人／假名垣魯文題」とあり、明確に「絵の余白に詞

書き」を書くという意味で用いられている。これを踏まえて浮世絵に見られる「填詞」を見ると、『芋喰僧正魚説法』（未十二改（安政六年十二月）・一惠齋芳幾戯画・山本平吉版）には長文の「填詞」と題する話が書かれ末尾に「忍川市隠 岳亭春信戯誌」とあるように、やはり「埋め草」として絵の余白に文字を填めるということから、画中の文章を示す用語として「填詞」が用いられている。ただし、近世期における常であるが、「填詞」という用語に統一されていくわけではなく、同様の意味で用いられている「記」「筆記」「醉題」「操觚」「暗記」「贅辞」「誌」「略傳」などという用語も見受けられるが、本稿では、魯文が良く使っていて他の戯作者にも波及し、明治期にまで使用例が及んだ「填詞」という用語を用いて、浮世絵に書かれた一定程度の分量を持つ文字部分を表すことにする。

以下、管見に入った魯文に拠る「填詞」が入った浮世絵を内容に則して例示していくことにする。本来ならば図版と俱に本文を紹介すべきであるが、紙数の関係から、今回は本文（の一部）だけを翻刻しておく。

◆海外風俗 異国を紹介する書は少なからず出されていたが、魯文は『萬國人物圖繪』（中本二冊、芳虎画、文久元年、山田屋庄次郎板）なども手掛けており、同趣の一枚摺をシリーズで出している。

歐羅巴州之内 佛蘭西國 （二川芳員画、泉市、文久二年（月）改戊（二）） 国文研

此國八十六州に分つ其首府を把理斯と号く舍撈河の畔にあり城門十七街衢七百十三あり府内人煙櫛の齒をひきたるごとく百貨具らざるものなし戸数三萬人口六十萬 諺に曰佛蘭西の人民は伊斯把尼亞の馬の如しと蓋し其數過多なるを称賛するなり國人伶俐能百事に勉強す婦女は貞操正しくて容顏艷麗なり

假名垣魯文記／『南京』

萬國名勝 大清南京府市坊 （三枚統、芳虎画、山庄、文久二年（月）改六戊（一）） 国文研

盡競之内

南京は支那の一大府にして當時清国王族の居城たり三方海洋に臨み城下巷街に下流をせき入れ諸所に橋を渡し市坊の商家數万軒両邊に棟を並べ將蠻國の商官此所彼所に居館を設け國産をひきぎ土産をあがなふこと本朝横濱の地に異ならず異人は海港に船をよせ出るあれば入ありて繁昌餘州に比する(な)し且都下一里を隔柳巷花街の一廓□□妓女三千嬋娟として錦繡の袖をひるかへし歌舞艷曲の調べ昼夜に絶ず總て支那五十八省の内南京の男女は形容艷優にして技藝にのみ心をゆだね利に走る事を専らとなせるにありそは暖地繁花の国風によるところ也とぞ

萬國嚙の作者 假名垣魯文譯誌

外人畫／亜墨利加人 (芳虎画、芝若与、[改西二二] 国文研)

洲中一部の國名を共和政治州また合衆國と号す近來版圖ますく加はり三十六州にいたる都府を華盛頓といふ萬國に往還して専ら貿易を盛にし通商を家産とす

魯文記

亜米利加婦人 (芳虎画、芝若与、[改西二二] 近森文庫)

此國は元歐邏巴人の開ける地なり季候大抵本朝に同じ北は新英吉利に接し南は墨是可にいたりその東西は大洋に臨めりその國の海港カリホルニアより船を出し萬國に往還し通商を以て家産とす

假名垣魯文記

外人畫／英吉利人 (芳虎画、芝若与、[改西二二] 国文研)

國の總称を大貌利太泥亜と云分ちて五十二州とす中に六十二の諸侯あり都府を龍動といふ四達闡にして數所の互市場きはめて繁盛なり府中の大河參摸斯河に奇巧の橋を架せり長百八十丈幅四丈餘ありといふ

假名垣魯文記

◆諷刺戯画『芋喰僧正魚説法』（芳幾戯画、山本平吉、安政六年十二月改）などは、蛸が大量に取れ江戸市中に出回った際にだされたようであるが、この種の錦絵も少なくない。異様に文字が多いのが特徴か。

〔目口耳鼻の自慢話を足叱るの図〕

（大判二枚続 一惠斎芳幾戯墨 慶応期カ）

目の目

「コウ皆の前で云ちやア目に角立て目闇に味噌を上るやうだが凡そ身体の内己等ほど重宝なものハ有やすめへ。早いことが良ハサ。ハテ昔から己等を日月に譬へて有やす。本当のことだが己等が無くバ一切万物面白イことも面黒いものも見ることもハ出来やすめへ。それだから悦ぶことを目出度と云ふヨ。だれたと思ふア、つがもねへ。

口の口

「モシ皆さん憚り乍ら御慮外乍ら私の云ふことを静かにして御聞なはい。野暮な奴の譬へに口ハ災ひの門舌ハ災ひの根だとか葉だとか吐したのハホシノ岡焼餅の甚助だよ。口広いことを云ふのちやアありませんが私が無くバハイ命を繋ぐことハ出来ません。旨い不味いの五味の味酸も甘いも噛分けて纏れたことを捌くも口サ。それを何の彼のと悪口を云れると口に年貢は要ないから此方でも喋りつける氣に成りますハネ。べちやくちや／＼／＼ア、氣怠く成つて来た。

耳の目

「皆さんの御話を一々聞分けて見ましたがそれハ所謂水掛論サ。唐土の老子とかいふ変人が云たにハ大声里耳に入らずトサ。しかしネ雅俗共に善ハぜん悪ハあくと聞分るが私の役サ。金言耳に逆ふとハ云ますが耳の穴を搔穿つて聞く時にヤア又耳寄りなことに聞きます。兎角耳糞の溜らねへ様に用心して呉れさすれば分からねことハ御座りやせんハサ。

鼻の目

「甚だ失礼な申分で御座居ますか私ハ大山に喩へられて面部の中でハ一座の座頭。自慢ハ私の持前だが満更耳を取て鼻へ付るやうな御託ハ上げやせん。しかし私がなけりやア柴舟蘭奢待伽羅や麝香を嗅分る理屈にやア参りやせん。夫だから世の譬にも一番先へ出ことを鼻驅だの鼻腹だ等と申シやす。天狗じやアねへがこりやア真似てハ御座へスめへ。足の曰

「これサく目の寄ところへ玉でも寄かと思つたら口広い喋だて耳やかましくつて鼻もちがならねへ。御前方よく聞つせへ。皆ハ用あるもの、理を知て用なきもの、理屈を知へからはなせねへ。夫有用ハ無用の道具でござる。そもく大地を踏を見よ。己が踏ところ有用にして踏ざるところ無用ならずや。その無用なところハ余人これを踏べし。各自が勝手のみを知て足の難儀をさつぱり知ず。又災ひハ口より起る。耳ハ淫声を聞いて汚れを悟らず五欲煩惱を萌し目鼻ハ香氣を嗅で費を厭はず。顔ハすなはち目口の置所なり。もし一つにても居所違へば此を片輪と誇るべし。見聞も嗅ぐも味ふも此足なくてハ適ふまじ。汝等口を養ふも手に具足する足あつて心の欲する所へ行に自由の足ると知ざるか。夫故足ぬを不足と云ひ余るを足ると云ふならずや。まだく沢山云ふことあり。コレヤ目玉汝逆上で煩う時ハアレ引きさげよ三里よと足へ灸ハ何事ぞ。口奴が飲酒酔狂の挙句の果ハ我等にあたり傘灸の苦しみハ如何ばかりと思ひやれ。其上目玉がぐらつく故足の我等ハ溝へ嵌り又ハ昼中犬の糞を踏む時は己が粗相を知りをらず足の汚れを数へたてヤレ汚ねへのどうだのと他人のやうに拔しをる。汝等がおこるその時ハ足ハ何時でも尻に敷かれ痺の切るが儲けとハ余り情けなからうト云れて顔ハ真赤に面目無げに聞、耳潰し鼻の頭に汗たらぐ一句も出ず閉口く。

物の原作者 假名垣魯文戯誌／＼惠齋芳幾戯画

◆見世物 「舶來大象圖」

（大判一枚、一龍齋芳豊画、

文久三年二月

「亥二改」、藤岡屋慶次郎）は

「天竺馬爾加國ヒツベルケン山の麓

大原野に生ずる処産てより三歳女象なり／于時文久癸亥三月上旬より西兩國廣小路に於て奉入御覽に候／魯文。象渴や

むかしを今の朧月」とあるが、興行宣伝のために使用されたのかもしれない。引札や報条との区別が微妙であるが、「大曲馬」のごとく興行の内容を詳説してあれば後日の記録のために作成されたものであると判断できる。

中天竺馬爾加國出生、新渡舶來大象之圖（假名垣魯文、一龍齋芳豊画、改亥二、藤慶梓、彫長） ADMIT

来ル三月上旬より、西両國廣小路に於て興行仕候

夫象ハ獸類の君主にして行狀さながら人林も及ばす。夜ハ子に臥て寅に起、清淨を食して紅塵をいとへり。支那の大國なるも其地に生ぜず。支那人其象を画にて觀のみ。故に漢土にハ象と号く。一身の運動鼻にあり。總體の力量背に止る。一度此灵兽を見る者ハ、七難を即滅し七福を生ず。看官駕を枉て奇々として拍掌すべし。

「大象の鼻にかけてはほのめかす、濁らぬ江戸の水の味ひ」

假名垣魯文

中天竺船來大象之圖（大判豎絵一枚、假名垣魯文賛、一龍齋芳豊画、改亥二、藤岡屋慶次郎板） ADMIT

亞細亞洲中天竺馬爾加國出生。生じてより僅に三歳。形象ハ泰山のごとく鼻ハ棧に似たり。總身黒色骨太く肉肥前足の爪ハ鼈甲に等しく後足の爪ハ碁石のごとし。尾ハ劍に似て耳ハ袋をかけたるごとし。于時文久三癸亥弥生上旬、西両國廣小路におゐて觀物場を開き、諸人の目前に一見を新にすること、ハなりぬ。

「姫氏國の毛綱につなく大象は、うこかぬ御代のためしとそなる」

假名垣魯文賛

佛蘭西大曲馬 CROUE SOUEE（大錦三枚続、假名垣魯文記、朝香楼芳春画、明治四年、改末十一、木屋宗次郎板） ADMIT

佛國の曲馬師「スエリ」と云るハ積年六十二歳、肥満勇壮の老人にして、馬術曲乗の業に於けるや、五大洲に雷鳴ハ轟き、世界第一と称するに足べき名譽稀代の人物なり。子弟子いづれも熟煉せざるハなく、衆目を驚かすが中に、

女、スリエ氏の曲馬早業千古未發の藝實に、神仙中の人なる歟

假名垣魯文記

○スリエ大きな馬を自在につかひ、馬その言葉に応じて、あるひハ横に寝、又ハ膝を屈め、早く駆けり静かに歩み、隠したる物を嗅付けてその在処を知る也。／＼三ッ毬を両の手にて使ひわけ、馬の背中にて拍子をとるなり。／＼並びて駆る二ひきの馬に彼方此方と乗り移りて、布をあやどり様々の曲をなして、後にわざごとあり」右

三びきのかけを追ひ走りながら、一人ハ途中にて一人の肩へ飛び付、図のごとくして走ること、かはるゝなり。これ皆なスリエ門人の曲にして目を驚せり。／＼二ひき並びて乗り、一人ハ馬上にて宙返りをなし、今一人の股を潜る早業。／＼スリエの女、馬の横腹に立ち駆け乗り、板子へ輪を括りて馬のえんを離れる名曲。／＼馬の後方に腰を掛け、あるひハ横になり、又ハ俯しながら輪乗の早業、筋斗をきり楽屋に入る。／＼馬の背中に鱗立となり、かけをおひ、あるひハとんぼ返りをして、つゝ立ち、又ハ片足にてかけをおひながら横になり、仰向俯となりて曲を尽す。」中スリエの門人輕業の一曲、高サ五丈余の上なる房より下り、身を反して彼方に下りたる撞木に飛び付くこと、猿の木ずゑを伝ふよりも速やか也。／＼スリエの弟子三人、梯子より下り、一人ハ手足を図のごとく反して左の一人の身体に飛び付き、兩人絡みてぶら下る輕業のはやごと、見物の肝を寒からしむ。／＼スリエ氏大馬に跨りながら身を輪にして馬上に筋斗をきること屢々、首尾に纏ひての離れ業、馬の背を離るゝこと五丈余なり。」左

◆鯨絵 「老なまづ」が魯文の手になるものであることが野崎左文『仮名反古』に記されており、北原糸子『地震の社会

史』（講談社学術文庫、二〇〇〇。初出は一九八三年『安政大地震と民衆』）では、他の魯文作という鯨絵と共に紹介されている。また、宮田登・高田衛監修『鯨絵』（里文出版、一九九五）に所収されている「鯨絵総目録」では、これらの鯨絵が図版とともに翻刻されている。しかし、鯨絵は〈際物〉であるが故に作者や画工名も板元も記されていないのが一般的であり、魯文の手になるものが多数在ると言われつつも考証は困難をきわめ進捗していないが、先行研究に拠って掲出しておく。

安政の大地震直後に出されたと思しき仮綴じの小冊子の方では、三田村鳶魚氏が「大道散人」という魯文の戯名を指摘している。鯨絵に見える「地震亭念魚」などと云う戯号も魯文かと思われる。

# 「老なまつ」／常磐壽無事大夫直傳

「そも／＼鯨の荒れたること、盤石に押され、諸々八方の災ひ数千人の見ごりをなして、古今の憂ひを増す。しゆんの時、怒りの時、天俄かに掻き曇り、大地頻りに揺りしかば、蔵と壁を防がんと、小藪の陰に寄りたまふ。此折町々廢屋となり、根太を折り戸を重ね、おのが軒端を塞ぎて、その梁をもたさざりしかハ、むざと最期と入寂のおはり、無駄死たまひしより、鯨をあやふと申とかや、かやうにすでかき間違に身を悔ふ民の憂ひをバ、君の情けでお救ひの、米の五合古壁のほこりたへせぬ天変地獄、どう／＼と、みくらのつちに、打たる、者こそせつなけれ」／安政二乙卯年十月二日／新吉原仮宅場所付「浅草之分／一 東仲町／西 同／花川戸丁／山の宿／聖天町／目瓦丁／山谷丁／今戸丁／馬道／田町／深川仲町」／「深川／一 永代寺門前仲丁／同 東仲丁／山本丁佃丁／松村丁／八幡御旅所門前丁／続御舟藏前丁／八郎兵衛屋敷／松井丁／入江丁／長岡丁／陸尺屋敷／時ノ鐘屋敷／常ハ丁」／げい者「おめにかけます軽わざハ野中の一本すぎてござります」／なます「七分三分のかね合／＼」

## 雨にハ 困リ 野宿 暫くの外寝 市中三疊／自作

「東医南蛮骨接外料日々發行地震出火のその間に、けがをなさざるものあらんや。数限りなき仲の丁先吉原が随市川、つぶれし家の荒事に、忽火事に太刀ハ、強くあたりし地しんの筋隈、日本堤のわれさきと、轉びつ起つかけゑほし、きやつ／＼と騒ぐ猿若町、芝居の焼も去年と二度、重ね鶴菱又灰を、柿の素袍ハ何れも様、なんと早ひじやムりませぬか、実に今度の大變ハ、嘘じやムらぬ 本所深川、咄ハ築地芝山の手、丸の内から小川町、見渡す焼場

の赤ッら、太刀下ならぬ梁下に、再び鋪れぬ其為に、罷り出たる某ハ、鹿鳴大神宮の身内にて、盤石太郎礎、けふ手始めに鯨をバ、要石にて押へし上ハ、五重の塔の九輪ハおろか、一厘たり共動かさぬ、誰だと思、ヤ、つがも内證の立退藝者の爛酒、焼たつぶれた其中で、色の世かいの繁昌ハ、動かぬ御代の御恵、ありが太鼓に鉦の音絶ぬ二日の大せがき、ホ、つらなつて坊主」

### 家苦はらひ

「ア、ラうるさいな／＼今ばんこよひの雨風に家くら堂社やしなべて町もやしきもおに瓦家根板迄もさらひませう。去ねんのやくの鯨めが一周忌にはやて風八月すへの五日はや軒なみそろふ家々も、きのふの無事ハけふの苦と、かはるもはやき飛鳥川、岡ハ淵瀬の大出水、かぜハおそれ入豆のさて／＼ふくハ福ハうち□□お門をながむればさらに戸板が舞上り平地の池となるかみに泪の雨の水まして、なぐる、船や竹いかだ、ながいものにハマきはしら立よるかげの大木も根から折口死出の山寺にはかなきおりからに、このやくはらひがとんで出ふくろの中へさらり／＼。

風雷散人戯述「印」

### ◆死絵「三代歌川豊国 死絵」

（大判二枚続、一鶯齋國周、「改子十二」、松嶋彫政、錦昇堂板）は元治元年十二月十五日に歿し

た三代豊国の追悼のために出されたものであるが、伝記事項を含む長文の「填詞」が付されており絵師の死絵としては破格である。魯文は「今年暮て今年の再来なく古人去て古人に再會なし／＼哥川の水原も涸て流行半月に變ずべし／＼水莖の跡ハとめても年波の寄せて帰らぬ名残とそなる／＼應畧傳悼賛需／戲作者 假名垣魯文誌」と追悼の賛を書いている。

一般的に「死絵」は歌舞伎役者の追悼として出されたものが多い。似顔で描かれ辞世や追悼の詩句が入れられているものも多く、「填詞」が入っているものは少ないと思われる。

◆実録講談 講釈師が読んだ剣豪の実録などの粗筋を紹介するものである。摘物が多かったと思われるが、大摘いで何枚になるか不明なものが多い。たとえば、『英名二十八衆句』（芳幾・芳年画、錦盛堂、慶応二年十二月改）は二十八枚組の最初に「目録」が附され、上に「勝間源五兵衛」以下「濱島正兵衛」まで二十八人が上げられ、下に「繡像略傳」の担当者として順に「假名垣魯文・岳亭定岡・山々亭有人・爲永春水、瀬川如皐・河竹其水、一葉舎甘阿・巴月庵紫玉・井雙菴笑魯・可志香以」が並べられ、「傭書 松阿弥交來」「彫工 清水柳三」「慶応三丁卯秋／梓客 錦盛堂」とある。

東錦浮世稿談 三好屋魯山 （一魁齋芳年筆） 国文研

是此一個の大剛勇士父兄の仇をむくはんと、廻國修行之武者わらぢ、ひまゆく駒の足がきをはやめ、光陰すでに古郷とほき彼みちのくの二本松に、はからず蒙し禍の、罪ならぬ身を言解ども、とくによしなき縛めの縄引ちぎり、獄舎をやぶりにて竟に天日を見る時を得たり。

填詞 かな垣魯文記

岩見重太郎包輔

東錦浮世稿談 伊東凌西 （一魁齋芳年、明治元年二月「辰二改」） 国文研

狐千歳を経て美女と化すと唐土の書に見へたれど、五百歳をたちて美童と化すの正説なし。虚か実かしらぬ火の筑紫の壮士宮本氏妖狐と試合の奇々怪々、虚々実々の談柄ハ凌西生が舌頭より講する所の名話にして最面白きハ白面の狐を説ける故なりしか。

填詞 假名垣魯文記

「宮本無三四正名」「妖狐の怪」

講演一席話

邑井貞吉

(大判、松雪斎銀光筆、「淺尾之局

尾上菊五郎」、渡辺彫栄、具足屋嘉兵衛)

都中央

善惡両面加々見の裏梅芳き名に似すやらで殘忍非道に組せし女夜叉奸毒忽ち報ひハ觀面縛のみか青蛇の苛責に苦痛の七轉八倒すねに疵もつ小笹原千里を走る惡事の條々淺きたくみの尾をあらはしてハ妖狐も裘を剥るゝに至れり

魯文述

於下總國笠河原競力井岡豪傑等大闘爭圖

(芳虎畫、「子二改」)

伊勢兼、彫長・松嶋彫大・片田彫長)

ルーアン美術館

近世水滸傳 完

異朝大宋の時、洪信伏魔殿を壊きて、百八の豪傑世に蹶れ、宋の天下を闇せし小説ハ、元の羅貫中が水滸傳に著明し。我朝いつの頃にや有けん、下總國笠河原といへる地に、其頃有名の俠客、競力富五郎といへる者、親分笠川の髭造が仇としねらふ、井岡の郷の俠首、捨五郎と出會し、互に子弟分と称ふる者数人を従へ、義を泰山の重に比し、命を鴻毛の輕きに競べ、耻を知り名をおしみ、双方一足も退かず、血ハ流れて河原をひたし、骸ハ積で山をなし、さけぶ声、天にひびき、劍の音、地を震ふ。そが中に、武者修行の浪士、平手壹岐といへる者、身找六尺有余、劍道司馬秀胤の門人にして、出沒自在の奥儀を極め、當世不思議の名人なりしか、此人にして此病あり。平生酒癖あしかりければ、師の勘氣をうけて浪々し、下總千歳の里なる競力が食客と成て在けるが、此闘争のおり、随一の競力方にて、井岡の刃勢と手いたく戦ひ、終に多勢の爲に討死をぞ遂たりける。競力方も数多の井岡勢とた、かふて、捨五郎を見失ひ、了に本意を遂すといへども、名を後世にと、めたり。

栗畧

假名垣魯文記

「笹川勢」「ましろの源治」「篠寄の政吉」「平手壹岐」／＼「水島破門」「成田の新藏」「浪切重三」「競力富五郎」／＼「清瀧佐七」「神樂獅子雷八」「地引の虎松」「なだれの岩松」「桐島辰五郎」「提緒の猪之助」「井岡捨五郎」

画工一魁齋  
名目一対競 美勇水滸傳

(中錦五十番統、一魁齋芳年画、假名垣魯文記、慶應三年八月「卯八改」亀遊堂壽梓)

龍宮 炎出見命  
龍種 竜王太郎

時代 黒雲皇子  
世話 白木駒吉

旧館 滝夜叉姫  
旧鼠 清水冠者

仁王 金神長五郎  
不動 俱利伽羅釵五郎

良門 相馬太郎  
鬼門 稲葉太郎

金猫 瑤巖の大領  
金鈴 魔陀羅丸

江ノ島 白菊丸  
大嶋 白縫姫

俊士 仁木弁之助  
勇士 高木午之助

妖狸 犬江親兵衛  
野猪 犬田小文吾

画工一魁齋  
名目一対競 美勇水滸傳

惣掇

一魁齋芳年画  
亀遊堂壽梓

中錦五十番續

|     |        |     |        |
|-----|--------|-----|--------|
| 横行  | 赤松重太丸  | 梅容  | 夢野蝶吉   |
| 飛行  | 姫松力之助  | 柳髮  | 女勘助    |
| 棧橋  | 木曾義仲   | 二郎  | 大原武松   |
| 虹ノ橋 | 尾形兒雷也  | 二刀  | 宮本武蔵   |
| 残刃  | 蝦蟇九郎   | 箱根  | 高木虎之助  |
| 虎狼  | 大蛇丸    | 山ノ井 | 六木杉之助  |
| 美善  | 鳥山秋作   | 強力  | 明石志賀之助 |
| 美惡  | 青柳春之助  | 強勇  | 大島丹蔵   |
| 東奥  | 松ヶ枝関之助 | 怪力  | 神洞小二郎  |
| 北雪  | 藤波由縁之助 | 怪傳  | 木鼠小法師  |
| 矢武  | 勇婦綱手   | 不入  | 姐妃のお百  |
| 弓張  | 勇妻八代   | 不二  | 三國太郎   |
| 天麗  | 大友若菜姫  | 良将  | 里見義成   |
| 天狗  | 小僧霧太郎  | 良士  | 牛若三郎   |
| 駿河  | 宇治常悦   | 美少  | 末珠之助   |
| 駿馬  | 犬山道節   | 美性  | 尾ノ虎王丸  |

假名垣魯文記

玄治店の画漢中。水滸一百八個を画巧て。画中の豪傑と称誉られしも。天岡地煞の星霜久しく。繪櫃の石碣堅固鎖して。再度開く洪信なきを。一魁齋芳年教頭。單身勇門の末坐に出て。師風を奪體換骨し。梓客の應需。義勇

善惡好漢麗婦の容像を画成こと五十員題号て美勇水滸傳と爲。嗚呼大哥の號架空からす 芳梅未春の諸木の魁。譬  
金聖嘆の繪難坊。伏魔殿の穴を鑿索。佳不佳の批評ありとも水滸最眞の稗官者流が。當世二代の画勇子と。ホ、  
請證て白す。

假名垣魯文題

### 炎出見命

炎出見尊兄の釣針をかり給ひ海辺に釣をたれたまひ終に失ひ兄の怒甚しきゆへ、あかめだいに乗り針を尋んとして  
龍宮に至り思はず豊玉姫と契、于珠滿珠の二ツを得給ふ。

### ※以下略

### 〔将門〕

（大判二枚統、芳虎画、〔午十〕 安政五年十月

都中央

相馬小次郎将門比叡山に伊豫掾純友と俱に平安城を見おろして四海平吞の逆意を企て直に東國に走下り下総國  
猿嶋郡廣山に内裏を建一門從類に高官を授け自ら新皇帝と号し専ら叛企の色を顯しまづ軍陣の手初に常陸大掾国香  
を亡し逆位旭の登るが如く空行雁も面前に落て忽地死せりといへり

鈔録一家 鈍亭魯文記

◆役者芝居 役者絵は浮世絵において中心的な題材だといえるが、役者名や狂言の外題だけではなく、台詞や長文の「填  
詞」が入っているものも少なくない。『源氏雲浮世画合』（一勇齋國芳画、伊勢市板、弘化三、五十四枚揃）は、各巻に則して  
巻中歌を色紙風に記した下に、芝居の登場人物を一部役者似顔を用いて描き、説明文の最後に「填詞 花笠外史」などと  
ある。これらは揃物としてシリーズ化されているものが多いが、一部分だけを掲出しておく。

美伊達 花方揃 俠気名弘  
五節句

一名ほめことば

（大判五枚組、豊國筆、假名垣魯文讃詞、〔亥九改〕、錦昇堂） 都中央

文久三年九月

新玉の 坂東彦三郎 音羽屋  
春五郎 薪水

定紋の鶴ハ。青陽の空に翅を伸。藝頭の評判ハ三都の櫓に殊高し。幼遊の風。に。九字菱の骨組よく。上る出世の位附立身大吉門松の。竹三とよびしも昨日とくれ。今朝新玉の春五郎。未年玉も若水の。元日一二日三坐の稀物。彼刈萱の山乃段にハ。名譽高野の奥儀をきはめ。汲やしつらん玉川に。古人紀伊國のおもがけをよくも写せし鏡。山尾上にからむ岩ふちハ。草履の手煉たしかにこたへ。小田に種蒔春永の長閑き業をみどりの松永。大入成せる大膳の。いきほひ竜の登るがごとく。實盛がものがたりにハ。弁舌布引の滝に似てよとまず道風の蛙場には。青柳のすりの深きをさぐれり。これを上げバイよくたかき。銀杏花菱鼻ばしら仁木彈正がせり出しは。高麗唐土にきこえたる。甘輝も稀代の秘術をあらはし我日の本の神風や。福岡貢の十人切。こハふるいちの古きをしたひし二見がうらの日の出の俳優。伊勢音頭の音羽屋にひきわたりし坂東武者。加役に若女形の大將軍。諸藝兼備の座頭。かぶ衆て旦那と俠客の花方。右も左もき、ものく。

※以下、弥生の 雛太郎 中村芝翫 成駒屋、轅熊の 鐘吉 河原崎権十郎 三升、二ツ星の 光吉 沢村田之助 曙、菊重の 陽三 市村羽左衛門 家橘、江戸前の戯作者 假名垣魯文 讃詞

近世水滸傳 (大錦繪 三十六番續、豊国画、万延二年九月「戌九改」、伊勢兼)

湯灌場小僧 吉三 市村竹之丞

吉三ハ礫川浄圓寺の門番吉平の倅にして幼稚より膽太く未前髪立よりして賭に耽り悪事にさかしき曲者なり茲に當時の小姓戸戌左門といへる者頗る文学ありて殊に無双の美男なれば檀家の中なる八百屋久兵衛が娘於七といへる美女此左門を深く戀慕し密に吉三を仲立として艶書を送り了に階老の契りを結べるを父久兵衛これを推し娘をとめ

て淨円寺に詣る事を許さるゝれバ於七思ひにあこがるゝをりから吉三來りて於七にいふやうおん身さまでに左門ぬしに會んことを思召給ハ、火を放ち出火の紛れに淨円寺に趣給へと言葉を巧みに示すにぞおほこ心の一筋に吉三がをしへしに／＼しけれバ吉三出火を幸ひに金銀財宝を若干盜とりし事忽に露頭て官府にひかれ於七と共に火あふりの罪科に所せられしかバ後人於七吉三郎と對せし浮名を世にうたひぬ

畧傳史 假名垣魯文記

※以下略。

## 蜘蛛絲錦白縫

義婦 岩井紫若 (國周画、㊦、片田彫長、元治元年八月「改子八」) 国文研

長門國竹寄に近き堀江の漁夫櫓作が女也。心操人に勝れ、兩親に孝心ふかく、其歳三十に近付迄、他人勸れ共夫を持ず。老父を養まんが爲に、沖に出て釣をたれ、魚を取ては市に賣、或時八人に雇れ磯山に行、焚木を樵に、生れ得て力つよく、男も及ぬはたらきせり。或夜いさき川に漁りせし罾の中に、父の恩人雪岡舜太夫が女照葉を引上て家に伴ひ、其來由を問けるに、照葉はなく／＼兄冬次郎が横死のことより、弟力松と俱に家來村岡真平を便て、はる／＼と長門路へ渡り來て、惡者の爲に力松がゆくへをうしなひ、その身はいさき川の土橋より落入しこと、しか／＼と語るに、恩家の退轉を、櫓作親子はうちなげき、てりはをいたはりかくまひける。かくて櫓作病死の後、雄浪がはら水棹が兄無理右工門と其伴牙八が爲に仇せられ、水棹は兄を討て深疵に死し、雄浪は從兄牙八を討とりて、てりは、ともな、出雲國琴彈山なる露月尼が庵に趣き、しばらく爰に身をかくせしが、又三賊の爲にしも大厄難を蒙りて、大力無双の義婦雄波も、鶏矇眼の病に賊手にかゝり、墓場のつゆとぞきえにける。

※以下、鳥山中村芝翫、龜谷多門之助沢村訥舛、菊池中村福助、玄海河原崎権十郎、大友沢村田之助、滝川市川九藏、雪岡坂東三津五郎、漁師市川家橘、雪岡冬次郎坂東彦三郎までは確認している。

## ◆料亭芸者

春色 三十六會席 (山々亭有人・假名垣魯文戲述、一蕙齋芳幾筆、明治二年四月「巳四改」) 高知市民図

山谷八百膳／深川平清／木挽町醉月／千束田川屋／代地川長／今戸大七／同有明樓／芝車家／坂本町錦語樓／本街小櫻／山谷八百半／築地青柳／平松町魚仙。品川町萬林／深川山松茂堂／両ごく青柳／柳ばし梅川／下谷松源／甚左衛門町百尺／おなじく豊田屋／高砂町万千／柳島はし本／金春三久／橋場川口／深川福安。しば大もん宝治／王子ゑびや／おなじくあふぎ屋／淺草廣小路壽仙樓／木母寺うゑはん／よし原京まち金子／同江戸町海老長／きはら店千歳樓／代地ともへや／既がし昇月／高輪萬清

花ハ盛りに月ハ隈なきを見て春秋長きを樂しむハ東京の餘澤にして。九夏の炎暑を兩國の橋間。隅田川の中洲にながし。玄冬の素雪を巨燧ぶとんに眺めて。家根舟の簾をかゝく四時の觀樂。その主とするハ食にあり。されバ割煮通の通家を撰みて。是に祥瑞の歌妓を添るは。蕙齋大人の筆頭に發り。並んで寸楮に戲文を述るハ。魯文有人の兩兄が筆端に成れり。此三子當世畫作中の三聖にして。所謂酢笹の粹達なれバ流行此画の中に籠り。製巧の美至れり盡せり。時勢粧の案内。是より穿てるハなしとせん。

応需 秋津齋我洲戲述「印」

春色 三十六會席 中代地 川長

「柳橋小勝・柳はし小満」(朝霞樓芳幾画、玉惣、明治元年十月「辰十二改」)

龜遊堂 集玉堂 愛錦堂 龜松堂合梓

同朋町を出る唄妓裏河岸を通ふ小唄、細腰の柳橋を渡りて右へ入る川長の樓上、角力甚九ハ櫓太鼓の赤萬が聲にして、すてゝこ踊りハ阿房珠丹が足拍子なるべし。澤瀉鶴かすかに囀り、哥澤の水細く流る。花柳の手振しなやかなる狐さんの腕前、節くれたる共に酒興の景物にて主とするハ當調進なめり。

假名垣魯文填詞

※以下略、品川町 萬林「芳町せい・よし町小糸」、東商國 青柳「柳ばしつま・同小かつ」、甚左エ門町 百尺樓「正木屋いく・三よしのふみ」と三十六軒まで続く。

以上、甚だ不完全ではあるが、魯文の関わった填詞の概略を紹介してきた。魯文研究にとって大量の逸文が存在していることを示したことになる筈である。此等を調査蒐集することは浜の真砂を数えるようなものかもしれないが、ある程度デジタル化した画像が公開され始めているので、嘗てよりは効率的に調査が可能になってきていると思われる。しかし、浮世絵の場合は填詞者の名前がメタデータとして登録されていないことが多く、一標目づつ見て行かなければならない。画像データを公開する時には、資料に記述されている文字情報は細大漏らさず書誌として付して欲しいものである。

## 注

- (1) 高木元「魯文の売文業」(『国文学研究資料館紀要』第三十四号、国文学研究資料館、二〇〇八)。なお、拙サイト <http://www.fumikuranet> で公開している版では多少増補してある。
- (2) 高木元「十九世紀の絵入メディア——錦絵の〈填詞〉をめぐる——」(『國語と國文學』一〇九五号、東京大学国語国文学会、二〇一五・二)
- (3) 現代に於いて「填詞」は楽曲の歌詞を意味するようで、「原文歌詞、中文填詞」という用例を多数見受けける。
- (4) 享和二年刊の森羅子著『燈下戲墨玉之枝』という江戸読本がある。また、馬琴が「とるにしも足らぬ燈下の戲墨、或は一時半閑の随筆」(文化十二年六月二十四日黒沢翁磨宛書翰)と記す如く、「燈下」と「戲墨」とは統けて用いられることが多かった。
- (5) 切附本とは主として安政期に魯文が主導して創出したジャンルで、すでに出ている読本や実録などの抄出を目的として粗製濫造された。高木元「末期の中本型読本——所謂〈切附本〉について——」(『江戸読本の研究——十九世紀小説様式攷』、ペリカル社、一九五五) 参照。また、魯文が仮名垣を使い出すのは万延以降であり、それまでは鈍亭を名告っていた。高木元「鈍亭

時代の魯文―切附本をめぐって―」（『社会文化科学研究』第十一号、千葉大学大学院社会文化科学研究科、二〇〇五・九）。

- （6）野狐庵は魯文の別号であり、序者の署名下の印に「尚古」とあることから、これも魯文である。つまり他序に見せかけた自序であり、江戸後期の戯作ではよく見掛けた。

- （7）高木元「二代目岳亭の遺業」（『人文社会科学科学研究』第二三号、千葉大学大学院人文社会科学科学研究科、二〇一一・九）参照。拙サイトでは増補版を掲載してある。

- （8）この資料はすでに注（2）拙稿「十九世紀の絵入メディア」で紹介した。なお、以下の原文は平仮名ばかりなので適宜漢字を宛て原表記は振仮名に残した。振仮名のない漢字と振仮名が括弧に入っているものは原表記。

- （9）この資料も注（2）拙稿「十九世紀の絵入メディア」で紹介した。

付記 本稿はJSPS科研費25370207の助成を受けたものです。